

本を選ぶ

NO.423 2020年(令和2年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>荻窪 Titleより (2の2)

●司書の眼 第41回

●「神は人に声を与えた。それを使うか、黙るかさ」

●図書館を離れて (第48回)

●鳥の目 80

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

荻窪 Titleより (2の2)

このコロナ禍は、あらゆる分野において、今後何年かかけて起こったであろう変化を加速させ、いま目のまえに持ってきたように思える。それは書店の現場でも同様だが、変化は何も、悲観すべきことばかりとは限らない。

わたしの店では本の通販も行っているが、その売上は4月5月で通常の7倍、それ以降も通常の3倍で推移している。もちろん外出を避けたい気持ちがあるのだろうが、それ以上に、「続いてほしい場所にお金を使う」人が増えた表れでもあろう。

安さや利便性を追求した結果、我々の社会はほんとうに豊かさを得たのだろうか。そのような疑問を持つ人は、自分の消費行動が、そうあってほしい社会と結びついていることを知っている。開始3日で1億円を集めた「ミニシアター・エイド基金」、そしてそれを参考に企画され、4750万円を集めた「ブックストア・エイド基金」など、この期間厳しい状況にある事業者への支援の輪が広がっていたが、それは「大切な場所は自分で守る」といった、新しい動きの表れであると思う。

移動や人との接触が制限され、自らと向き合うしかなくなったとき、自分にとって本当に必要なものは何だろうと、この間考えた人も多いのではないかな。そしてこの期間は人の本を求める気持ちが、よ

りはっきりと感じられたときでもあった。

わたしは店のウェブサイトで「毎日のほん」として1日1冊本を紹介するほか、入荷した新刊本をtwitterで紹介している。それは開店したときから続けている仕事だが、このコロナ禍に入った時期からいまに至るまで、その文章がこれまでよりも深く読まれていると感じることが増えた。数年前に新装版が出た、メイ・サートンの『独り居の日記』を店であらためて紹介したところ、3000円以上する本を2カ月で50冊近く買っていただいた。

自分でもその本を読み、借りものではない(わたし)のことばで、それを伝え、売っていく。それは何もわたしの店だけに限ったことではない。他店のSNSを覗けば、それぞれの店が独自のロングセラーを作り、売り込んでいることがわかる。売り手の姿勢を明らかにすることが店の信用をうみ、あたらしい本を売る土壌をつくるのだ。

事業を拓げるよりは深めていく。それが今後のトレンドになっていくのではないかな。そしてそのような時代では、「なんとなくやっている」仕事は、自然とお客さんのほうに伝わってしまい、求心力もたなくなる。それはこれまでもあった流れだが、社会のスピードがすこしスローになったことで、よりはっきりと目に見えるようになってきた。

本を扱う人にとって、本に対する深い理解が求められる時代である。しかしそれは、もともとこの仕事の本質でもある。意欲のある人にとっては、やりがいのある時代がきたともいえるだろう。

(辻山 良雄)

司書の眼 第41回

—そこにいること、そしてテレワーク—

鷹野 祐子

コロナ禍の副産物として、オンラインでのコミュニケーションに慣れてきた。月1回の英語教授法の集まりやレッスン、お絵かき算数の生徒さんとのレッスンもオンラインで継続できている。ちょくちょく参加していたセミナーも、開催地が遠くで行けなかったシンポジウムもオンライン参加ができる。しかし残念なことに、司書の仕事に関してはその半分以上がオンラインで済ませることができるとわかったにもかかわらず、職場では在席を求められている。「そこにいること」が大事なのだそうだ。緊急事態宣言がだされたときは、さすがに職場でも8割在宅ワークという指示がでたので、自宅でオンラインワークをし、文献の受け渡しや雑誌資料の受取りのためだけに出勤していたが、解除されてからは「特段の事情がなければ10割出勤」を暗黙の了解で出勤を求められている。そもそも、緊急事態宣言中に毎日出勤していたのは主に管理職だったので、その人たちは在宅ワークでも仕事が過不足なく回ることに気が付いていない老害となっているのではないか。見えるところにいれば、職員が仕事をしていることが一目瞭然だし、見えなくなったらこいつら何をしているのかわからん！けしからん！という気持ちだろうか。このコロナ禍はいつまで続くかわからず、IT環境はもうテレワークができるところまで来ているのである。ぜひとも管理職から積極的に在宅ワークをし、それに関係して気づくことになるワーク・ライフバランスを熟考させるような研修が必要なのではないかと思う。

先日も日経新聞に「ルーシーの夢を叶えよう。#女性のリーダーを増やそう」という広告があった。オンラインワークという素材の中性化と、家にも仕事が回る仕組みは、家庭も仕事も大切にしたい男女を同等に応援していくのではないか。といっても、あの人たちは、家で長時間過ごしていたくないのだろう。世の中の変化に対応するには積極的に自分の置かれている環境を変えること

が必要である。緊急事態宣言中、部屋の模様替えをした人は少なくないだろう。携帯でミーティングできるように携帯ホルダーを買ったり、Wi-Fi環境を整えたり、オンライン・ミーティングの画面写りがいいように窓からの光をとりいれたり、背景に映るものを工夫したり。私も雑多なものが入っていた本棚を統一したものに置き換え、見せたくないものは見えない工夫を施した。気ままに外出できない中、散歩をしたりトランポリンを買ったり運動に努めた人も多いだろう。休校中の子どもたちとの数分のなにげない会話で得られる生活の充実感を感じた人もいたのではないだろうか。学習を見る時間が多くなったことでその子の特徴や今の学校教育について考えた人もいただろう。

通勤に往復2時間費やすことは、一人になれる貴重な読書時間でもあったが、案外通勤時間がなくても、普通に仕事ができ、余暇の時間を生活にうまく取り入れればいいのではないかと感じた。また、私自身は2割出勤していたので、週に数回は外の空気を吸うことができたが、夫婦で10割在宅&休校中の複数の子どものたちという家庭では、家の中が密になりすぎトラブルを招いていたようだ。なにより食費が倍増である。そして在宅ワークをするなら、住む家を選ぶ基準も変わってくるなあ、と思う。日頃は草むしりなんかやりたくないものだが、庭付き一戸建てで庭の手入れをしているインスタなど見るとうらやましかったものである。

もう一つ、このコロナ禍で気が付いたのは、今までしてきたサイクルを人はなかなか変えられない、ということ。現在私は、図書館総合展でメンバーの方にお会いしたご縁で、「障害に関することを描いた子どもの本のリスト」(障害と本の研究会(菊地澄子代表))の発行に関わっている。メンバーは各自が毎年出版されるこどもの本を読み、年に一冊書評リスト本として発行している。選書される本は、「子どもが読む」ということを念頭に選書

されていて、絵本からよみもの、YA、大人のための参考書などがあげられる。「障害」といっても、知的から身体、病気、発達障害、家族の病気など幅広いので、選ぶ本には事欠かない。メンバーには70代の元教員が多いが、作家、定年後臨床心理士の資格をとりカウンセラーとして被災地を回っている方、日本子どもの本研究会で最新刊の書評をされている方、地域の図書館活動に貢献されてきた絵本画家、特別支援教育指導者養成学校の教師、元中学校司書、学校サポーターなど多彩である。毎月1回編集会議があり、それぞれの書評をもちより最近の活動について情報共有している。しかし、今回のコロナ禍で数か月編集作業が滞ったうえ、主な販売ルートである日本子どもの本研究会総会や図書館総合展でも販売できなくなったので、こんな時期に危険を冒してまで発行する気味では露とも思っていなかった。しかし、主メンバーはどうしても「今年もいつも通り」発行したいという気持ちが強く、6月から編集会議を行い、現在最終編集作業の真最中、10月には発行できる予定だ。サイクルを変えることは悪だと思っているのであろうか？ もし休刊したら、それで糸が切れてしまうと思っているかのように真剣に「今年もいつも通り」発行したいという気持ちが伝わってきた。メンバーの中でも若い世代の私は大変不思議に感じたものである。もしかすると、「いつなにかあるかわからない」という気持ちの濃さの違いなのかとも、「常に力のかぎり頑張りぬく」という気持ちの温度差なのかなとも思う。

最近の傾向としては、家族に認知症やがん患者さんをもつ子ども心について書いた本、発達障害、LLブック、障害を持つ人の就労である。認知症に関する本は最近とても増えていて、社会の認知が広まったことを感じる。認知症になった認知症専門医、精神科医の長谷川和夫先生が書かれた「だいじょうぶだよ一ぼくのおばあちゃん」を次号に書こうかな？このリスト本に興味を持って下さった方は、一般社団法人 日本子どもの本研究会障害と本研究部 (<https://www.jasclhonken.com/>) ま

でご連絡ください。

Do the hokey pokey

緊急事態宣言中出勤して利用者に出会うと、なぜかとても喜ばれた。この部屋にくるのは心のリフレッシュとまで言われてしまった。コピーをとり、新刊を確認に、などの用事でふらっと来た時、そこにいる人と毒にも薬にもならない会話を気楽にできることはどうもとても嬉しいらしい。サードスペースからもうちょっと変わったかな、という印象である。

先日科学新聞に今年の7月にでていた今後の「次期国立大学法人等施設整備計画策定に向けた中間まとめ」が (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/056/gaiyou/1422789_00005.htm) 載っていた。今後の国立大学等における施設整備は、キャンパス全体を「共創拠点」、すなわち「イノベーション・コモンズ」として捉え、その充実を図ることが必要とされている。「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」とは、あらゆる分野、場面、人が共に創造活動を展開する「共創」の拠点、教育研究施設だけでなく、食堂や寮、屋外空間等も含めキャンパス全体が有機的に連携した「共創」の拠点、ソフトとハードが一体となって取り込まれる「共創」の拠点、なのだそう。

研究所の図書室のあり方についてここ数年議論を重ねているが、まさしくそういう青写真で進んでいる。なんでもありの場所だが静空間と動空間をわけ、フランス宮廷や貴族の社交界サロンのような空間にするのである。そして、コロナ禍のスペースをちょっと加え、気軽にオンライン・ミーティングやオンライン講義ができ、密をさけた個人集中型ブースがあり、ちょっとしたリフレッシュ空間でストレッチをすることができる。誰かが「そこにいること」が大事なのだ。コロナ禍がちょっと後押しをしてくれたので、順調に改装できそうである。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

「神は人に声を与えた。それを使うか、黙るかさ」

—映画『パブリック 図書館の奇跡』鑑賞記—

小笠原 清春

STORYは・・・記録的な大寒波が襲来し、緊急シェルターからあぶれたホームレス集団が、公共図書館のワンフロアを占拠。突然の騒動に巻き込まれながらも、彼らの境遇を心配した図書館職員のスチュアートは、彼らと行動を共にする。しかし、メディアの報道などでスチュアートは危険人物に仕立てられ、警察機動隊の実力行使も秒読み段階に・・・。

まず特筆したいのは、図書館が舞台で図書館員が主人公でも、面白く説得力ある劇映画ができるということ。これまで日本で作られなかったのは何故？

主題は、『パブリック』という題名通り「公共性とは何か」ということなのだが、それだけでなく、オピオイド問題（薬物依存症）、退役軍人の問題、フェイクニュースの問題など、今のアメリカが抱える様々な問題（もちろん、日本に住む私たちにも無縁でないが）もさりげなく取り入れている。

映画の作りは古典的というか極めてオーソドックス。派手なCGを使ったアクションもなければ銃撃戦もない。その代わりに、一人ひとりの人物造形に深みがあるので、お互いのやり取りが響き合う。単純な社会派映画で終わらず、人情映画やコメディの要素もあるなど多面的な顔を持った作品に仕上がっていて、何とも上手い映画だなと感心した。

だがやっぱり、元図書館員として気になるのは、図書館がどう描かれているのかということ。

これがまあ、図書館員の琴線に触れることばかりで、よくリサーチしたなと驚嘆する。

冒頭、モノクロのひと昔前の教育映画と思しき画面に「本が好きで、人と関わることが好きなら、あなたは図書館員に向いている」とのクレジット。オオーと思う暇もなく、それを合図のように、シンシナティの町を背景に「本を燃やせ」というリ

リックも強烈な『Weaponized』が流れ出す（パフォーマーは、ホームレスのビッグ・ジョージ役を演じたラッパーのライムフェスト）。これでツカミはOK！

さらに映画の中に登場する、利用者との様々なやり取りやトラブルには「うん、あるある」と頷ける方も多いはず。様々なクイック・レファレンスの挿入も良いリズムを作っている。

それに加え、利用者の秘密を守ること、あらゆる人に情報・資料を提供することなど、図書館として発信すべきこともしっかり押さえている。

主人公のキャラクター設定も絶妙で、どちらかと言えば地味で気弱なタイプに。一見、主役と程遠い典型的な図書館員というところなのだが、感心するのは、常連のホームレスたちをファーストネームで呼び、挨拶を交わしていること。アクティブではないが、押しつけがましくないところも好ましい。他の職員たちにも同じ匂いを感じた。

ともすると私たちはヒーロー、ヒロインを求めてしまうが、公共の現場に真に必要なのは、プリミティブな正義感を持つ、決めつけることをしない傾聴力のある職員であることに思い至る。

昨年公開の映画『ニューヨーク公共図書館』では、「最終的に変えるべきはこの街の文化だ」という発言が印象的だったが、その一つの答と言えるものがこの映画で発見できる。それは、市民を味方につけること。そのためには、何が起きているのか、何を考えているのかを伝えること。物語後半でそれによるサプライズが描かれグッときてしまった。

（おがさわら きよはる）

昨年公開の映画『ニューヨーク公共図書館』では、「最終的に変えるべきはこの街の文化だ」という発言が印象的だったが、その一つの答と言えるものがこの映画で発見できる。それは、市民を味方につけること。そのためには、何が起きているのか、何を考えているのかを伝えること。物語後半でそれによるサプライズが描かれグッときてしまった。

（おがさわら きよはる）

*本稿タイトルは、この映画のキーワードとも言える科白からお借りました。

『パブリック 図書館の奇跡』

●製作・監督・脚本・主演：エミリオ・エステベス

2018年製作／アメリカ映画／119分

配給：ロングライド

図書館を離れて (第48回)

— 「いく」と「ゆく」③ —

並木せつ子

前回見てきた明治生まれの人たちは、漢字の「行く」だけを使う人と、「行く」と「ゆく」を併せて使う人が主流だった。「いく」は石井桃子が「ゆく」とともに使っているだけである。それも「ゆく」に比べれば数は格段に少なかった。

大正生まれ

堀文子(1918年生)は《イタリアへ行く》《女がお嫁に行く》《絵を描いて生きていきたい》のように「行く」と「いく」の2種類を使い分けている。《変わってゆく》が1例だけあった。

岡部伊都子(1923年生)は《学校にゆけない》《心惹かれてゆく》とひらがなの「ゆく」だけを使う。石井桃子と同じように《食べにいった》のような場合も「行った」ではなくひらがなである。ひらがなの「いく」も使っていない。

志村ふくみ(1924年生)は「行く」と「ゆく」を使う。《(インドへ)行く気になった》、《緑は数秒にして消えてゆく》というように、場所的移動の場合は「行く」、時間的経過の場合は「ゆく」と意味で使い分けている。「いく」は使わない。

高峰秀子(1924年生)も志村と同じように《動物園へは行けなかった》《散歩に行く》《演技者になってゆく》など、ほぼ「行く」と「ゆく」を使い分けている。

武田百合子(1925年生)も《散歩に行くことにする》《毎日少しずつ赤くなってゆく》《うまくゆかなかった》のように、「行く」と「ゆく」を概ね意味で使い分けている。ただ《迎えに行くことにする》《迎えにゆく時間》のように両方使用している例もあって厳密ではない。

茨木のり子(1926年生)も武田と同じように一応「行く」と「ゆく」派で、《行きたいところへ行って》《流されてゆく》《にっちもさっちもゆかない》のように意味で使い分けている。こちらも《生きてゆけない》《生きていける》両方の使用例があり、少数だが「いく」も使っている。

昭和初期生まれ(1926～29年)

石牟礼道子(1927年生)は《鳥を見にゆこうとした》《芯にゆくほど甘くなってゆく》のように、すべて「ゆく」で、「行く」「いく」は使わない。岡部伊都子と同じ「ゆく」だけ派だが、《連れて行ってもらった》のような場合には漢字の「行」を使う点が違っている。

田辺聖子(1928年生)は《私の行く古本屋》《図書館へ行けば》《入試から漢文が消えてゆく》《(教養は)貯められてゆくものだ》と、「行く」と「ゆく」を意味で使い分けている。《祭の町へ出ていく》のような例も無くはない。

柄折久美子(1928年生)には《アトリエへ行きましょう》《静かに入ってゆき》という使用例があって、一見すると田辺聖子と同じようだが、柄折の文章には「……てゆく」という言葉があまり出てこない。同じと言いきるには例が少なかった。

向田邦子(1929年生)は《買い物にゆく》《そうはゆかない》と意味に関わらず、基本的にひらがなの「ゆく」。石牟礼と同じく「行った」の場合だけ漢字を使用している。まれには《有志で行くことになった》《行きつけの美容院》と「行く」を使う例も無いではない。

須賀敦子(1929年生)は《魚を買いに行く》《迎えに行く》《会話の深みについて行けなかった》《悲しんでばかりいるわけには行かない》と意味に関わらず「行く」が多い。但し《理想を徐々に浸食していく》《窓の外を過ぎてゆく電柱》のようにひらがなを使った例も無いではない。

大正から昭和初期に生まれた人たちも、明治生まれと同じく「行く」と「ゆく」を併せて使用する人が多かった。その中で、堀文子は「行く」と「いく」、岡部伊都子、石牟礼道子、向田邦子は「ゆく」のみ、須賀敦子は主に「行く」を使っている。

明治生まれのように漢字の「行く」だけを厳密に使う人は見られなくなり、明治にはいなかった「いく」を中心に使う人も現れた。そして一人の人が「ゆく」の中にひょっこり「いく」を使ったり、その逆もあつたりと、明治生まれより少し緩やかになったという印象であった。(なみき せつこ)

「流さるゝ浮巢」

「鳩の浮巢」は、カイツブリがヨシなどの水草の間に草の葉などをからめて水に浮くように巢を作りることから、平安時代からは「よるべないあわれなもの」として歌に詠まれ、源頼政の「子を思ふ鳩の浮巢のゆられきて捨てじとすれや水隠れもせぬ」がよく知られています。この「浮巢」は夏の季語として、後世の小林一茶の句「鳩の巢の一本草をたのみ哉」（七番日記）や正岡子規の「流さるゝ浮巢に鳩の声悲し」（浮巢）など俳諧にも引き継がれて今日に至っています。

しかしながら、平安時代後期に、このような浮巢の観賞について巢の造作面から異論があったことが、鴨長明の歌論書『無名抄』（1211年以降）の「鳩の浮巢」の章段で分かります。建春門院北面歌合で勝の判定（判者藤原俊恵）を得た源頼政の前記の歌について、俊恵の弟の祐盛法師が、鳩の浮巢は「あしのくきを中にこめて（組み込み）、しかもかれをばくつろげて（それを広げて）、めぐりにくひたれば（そのまわりに巢を作っているから）、潮満てば上へあがり、潮干れば従ひてくだるなり」、「かの浮巢は揺られ歩くものにあらず」と言い、歌合せの座にそのことを知っている人がいなかったため頼政の歌を勝と決めたのであろう評しています。（『無名抄』鴨長明／久保田淳訳注 角川文庫／2013年）当時すでに「鳩の浮巢」がただ水に浮いているだけでなく、容易に漂い流れ出ないようにカイツブリの造作がされていることに関心を持った文人がいたことは興味深い話です。

「浄めの童女」

その昔私たち山村の子供は、村のため池などのカイツブリに手を出すことは厳に戒められていました。当時はそれがなぜなのかよく分かりませんでしたが、後年、薄田泣菫の詩「鳩の浄め」（『白羊宮』明治39年『泣菫詩鈔』岩波文庫／1928年）に出会い、それが納得できたように思いました。

6連の詩の前半の3連はつぎのとおりです。

夏なかの栄えは過ぎぬ、
くたら野の隠れの古沼、
「静寂」は翼を伸して
はぐくみぬ、水のおもてを。

鳩や、實に浄めの童女、
尼うへの一座なるらし。
なづさひの羽きよらかに、
水濁なす水濁に浮きつ。

水漬く葉の真菰のみだれ、
伏葦の臂のひかがみ
末枯や、——さても齋場
おもむろに鳩は滑りぬ。

明治30年代、象徴派詩人として詩壇で活躍した泣菫は、れんこんの栽培で知られている岡山県倉敷市連島の生まれです。この「鳩の浄め」はカイツブリをある古い沼の「浄め」の鳥として歌っていますが、このようにカイツブリを聖域に仕える清逸な鳥として歌った詩歌を他に知りません。

浮巢での子育てが終わった秋の湖面は、ときに台風の激しい吹きさらしにあいます。カイツブリ親子は風雪の季節を耐え、多くの危険をくぐってやがて来る繁殖期にそなえ厳かに「齋場」を泳ぎ、コウホネなどの水草が咲く夏を待ちます。ちなみに、カイツブリのひなは生後1年で性成熟し、繁殖しますが、厳しい環境を生きる野生の摂理なのでしょう。こうした小さないのちが循環する湖沼は、また水田に水を引き、ハスが咲き、鯉が育つ村人にとっての聖域であり、カイツブリはまさにその「浄めの童女」でありました。

巢の造作と新たな危機

カイツブリの巢の造作については、昭和初期に仁部富之助による詳細な観察があります（『野の鳥の生態2』大修館書店／1979年）。仁部が秋田県花館村（当時）の大戸川上流の小沼でカイツブリの巢を初めて見たときは、水面に浮かぶひとかたまりの巢

の下部がヒルモか何かのツルをいかり綱としてつないであり、カイツブリの巣はこうした「詩的な造作」(前記の一茶の句が想像される)として疑わなかったと言います。しかしその後のくわしい観察で、そのような造作はまれで、普通はマコモなどの水生植物の茎を何本か水中で交差させてしっかりした支えとし、その又の上にマコモの古根株や枯葉などを積み重ね、水面の上だけを柔らかい水生植物を積みあげて小ぎれいに仕上げている、思ったより丈夫なことを知ったそうです。

その巣は意外に大きく、直径50～60cmのゆがんだ球形で、大部分は水中にあり、水面から出ているのは径4050cm、高さ3～4.5cmのまんじゅうを思わせる部分だけで、その中央に径13～14cm、深さ3～4cmのいわゆる「産座」があります。

とくに巣の水上部はコウホネ、ヒツジグサ、ヒルムシロ、キンギョモなどの生葉が迷彩に使われ、しかも卵をかくすために生葉が常備されています。

以上のようなカイツブリの巣作りの苦労にかかわらず、最近の異常気象による台風や大雨は容赦しない危険な様相を強め、かつての「鳩の浮巢」の風景を一変させています。

浮巢の造作には水草が欠かせません。「鳩の海」

といわれる琵琶湖には33種もの水草が生育し、マコモ、ヨシなどの抽水植物やクロモ、センニンモなどの沈水直物が巣作りに使われてきました。しかし近年、全国各地の湖沼にも言えることですが、自然湖岸の消失に伴う水草の減少による水質悪化、水質悪化でのさらなる水草の減少・絶滅、加えて度重なる台風による水草の流失で、浮巢作りに支障を来していると言われます。

東京・井の頭公園池では地盤沈下で1960年代に湧水が枯れ、水質悪化で水草が姿を消しましたが、2014～17年の水質改善や外来種対策としての「かいぼり」(池底の泥の換え掘り)の結果、絶滅危惧種の水草ツツイトモが見られるようになり、昨年2019年には大繁殖し、複数のカイツブリがツツイトモを使って営巣するようになったとの明るいニュースがありました。(2019年6月25日/毎日新聞夕刊)

しかし各地の多くのため池などの沼池や河川では、今年も連続する豪雨や台風による増水、土手の決壊、氾濫の中で、雑木や水草などとともに「流さるゝ浮巢」にカイツブリ親子が声さえ出せず消え去っていくことをおそれます。

(ためさだ さだと さいたま市図書館友の会)